ニュージーランド乳幼児教育カリキュラムから考える言葉と表現

川瀬雅（環太平洋大学）

１．はじめに

ニュージーランドの乳幼児教育のテ・ファーリキは、ナショナル・カリキュラムとして 1996 年に策定された。このカリキュラムには様々な特色があるが、なかでも、二文化主義の実現や、インクルーシブでホリスティックなアプローチが先駆的だと評価されていた。わが国の教育要領とテ・ファーリキを比較すると、テ・ファーリキの 5 つの要素と教育要領の 5 領域は一致する部分があり、そのうちテ･ファーリキの「コミュニケーション」は教育要領の「表現」と「言葉」が統合していることが明らかになった（平松ら、2021）。本研究では､我が国の教育要領における 5 領域から「表現」と「言葉」をとりあげ、これらとテ・ファーリキの「コミュニケーション」を比較することで我が国の幼児教育における「表現」と「言葉」の教育内容の意味について再考したい。

２．教育要領の「表現」と「言葉」

我が国の幼児教育は小学校教育要領との一貫性をもたせるカリキュラムの構築を目指すことからはじまっており、「望ましい経験」として 6 領域（①健康②社会③自然④言語⑤音楽リズム⑥絵画製作）が示され、1989 年の教育要領改訂で 5 領域（①健康②人間関係③環境④言葉⑤表現）に変更された経緯がある。5 領域において言葉は「意味のあるものとして使われる」とし、表現（造形、音楽、身体表現）は、「感動の手立てとして活かされる」（無藤ら、2017）。一方で、内容について確認すると､言葉は経験や考えを伝える手段であり、表現もまた感じたことや考えたことを表現することで伝える手段の獲得を目指しており、両者ともに「伝える」役割を担っていると考えられる。教育要領では、言語／非言語を獲得する目的が異なっていても、結局のところ同じ役割を担っており、根源は同一である。

３．テ・ファーリキの「コミュニケーション」

テ・ファーリキにおける「ことば」は、単語、文章、物語など言語的に表現されたものだけではなく、手話、数字、視覚的なイメージ、美術、ダンス、演劇、リズム、音楽、動作などの非言語的に表現されたものも含まれており、言語／非言語を問わず、子どもが第一言語として使うあらゆる手段を網羅している。例えば、ニュージーランド手話や、発話がない子どものための補助・代替コミュニケーション（AAC）や、聴覚障害または難聴の子どもについては、見る行為も「聞く」ことに含まれる。保育者は 1 人ひとりの子どもが使っている言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションの両方のアプローチを推奨されており、これが子どもたちのアイデンティティを尊重することに繋がっている。

つまり、ニュージーランドはコミュニケーション手段のために様々な表現方法を獲得することを目的としていて、これによって様々なアイデンティティを持つ他者とのコミュニケーションを可能にし、共生することを実現している。

４．まとめ

我が国においてもテ・ファーリキのように言葉と表現の根源は同一であることを自覚し、コミュニケーションのために言葉と表現を獲得することで、教育要領で求められる「豊かな感性と表現」が拡大するだろう｡これによって､意図せずとも、インクルーシブな教育の実現が可能になり、現代の幼児教育における教育課題に寄与することができる可能性がある。